

## 秋成の一首・成美の一句：その筆蹟と解説

市場，直次郎

<https://doi.org/10.15017/10510>

---

出版情報：文献探究. 9, pp.1-4, 1981-12-15. 文献探究の会  
バージョン：  
権利関係：

# 秋成の一首・成美の一句

——その筆蹟と解説——

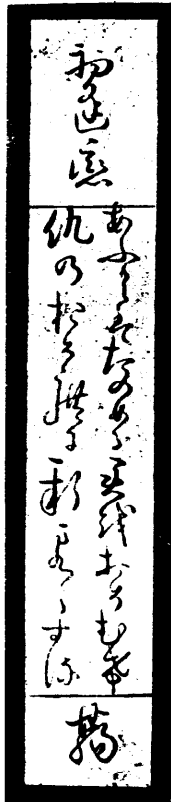
市場直次郎

## 序言

上田秋成と夏目成美とを対照して論ぜられたのは、管見では山口剛先生が最初ではなからうか。その著「西鶴・成美・一茶」(昭和六年)のうち、成美篇に「随齋成美の心境」の一章があり、著者一流の歯切れのよい筆調で、成美を対象として秋成と対比しながら、「秋成の指と成美の脚。この二つのものが対をなして、ふと胸に浮かぶ。」これを焦点として、特に俳人成美の生活と心境に迫られたのである。

その後、この本は「山口剛著作集」の第二巻(昭和四十七年)に収められたが、原本にあっては成美筆自画賛の写真版は省略されて、残念はがう見ることが出来ない。

秋成や成美に関する研究は、その後長足の進歩を遂げ、それらに関する資料の発見紹介相次ぎ、いまさら私どもが口出しをする要はないのだが、いささかの参考までに、先学の故知に倣って、秋成・成美二家の筆蹟を取合せ、愚見の一端を加えてみよう。



一 上田秋成の和歌

(題) 初逢恋

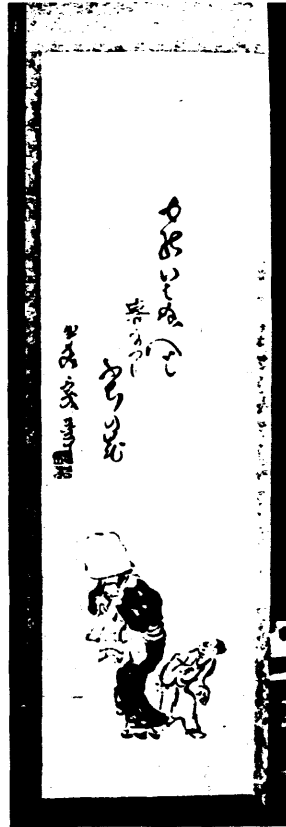
あふからはたのめる君を打えむけ

仇のおえれに新まぐらする 無腸

紙本短冊(縦三五八、横五八〇)に墨書。料紙の上部(題名の下)と下部(署名の上)とにそれぞれ茶褐色の横線を引く。いわゆる秋成ごのみの短冊である。

署名「無腸」は秋成の別号、壺の異名無腸公子に因む。秋成の和歌の揮毫にこの署名を多く見る。題名「初逢恋」は秋成の既発表の題詠中に見当たらず、この歌材もまた珍奇である。なお、この筆蹟は遒筆はがら丁寧は趣があり、視力の弱った晩年の奔逸の風がはいことは、この揮毫の年代を暗示するものであろう。また、この署名

の「無腸」および「君」「打をむけ」「する」ほどの文字に、筆者の筆癖が見られる。



## 二 夏目成美の画賛発句

ものいはぬ人も 春はり ふちの花

成美戯筆（印文・成美）

紙本半切（縦八二六、横二四二）の下方に、尺八を吹きながら歩む虚無僧とこれを見送る童子を描き、上部三行に右の俳賛と落款。掛軸に仕立てて保存する。

画は狩野派風の肥瘦の著しい墨書きに、僅かに代赭色の淡彩を施す。発句は筆圧の強い個性的な書風、特に落款の文字は一見して成美の自筆と肯かれる。

発句は『成美家集』（文化十三年）上巻「春」の部に、このままの形で載るが、画賛句としては初見である。

## 付 説

近世歌人としての上田秋成は、小説作家としての偉大な業績に蔽われて、影の薄い存在である。しかしながら、彼の和歌にはやはり秋成ならではという特色があつて、同じ学統に連なる他の国学者とは異なる存在であることは、夙に空田空穂氏によつて指摘されるところである。氏は秋成詠の特色として、「興味に触れて目こをましましにすると態度と、作品の陰影の深さを奪がられる（『藤葉冊子』解説）。前掲の一首は、まさしくその特色を具え、しかも小説作家秋成による複雑な構想を窺わせる。

私はこの一首から『雨月物語』の「浅茅が宿」と「蛇柱の淫」を連想する。それは、女性を主人公としての駈りつ深い雪圍を相似もえることながら、ともに仮構の世界でわりながら、実在の人間性に深く根ざしている点において共通する。かゝいえばとて、この和歌がかの小説の綱索であるという意味では決してない。和歌の作者無腸は、同じ「性」を主題にしながら、小説の主人公にはちと対蹠的は筋書きをとるのである。すなわち「たのめる者」と「新まくら」とを両極として、屈折する女性心理をテーマとする短歌体の「小説」を構成するのである。読者はこの場面を契機として、ここに至るまでの経路と、この後に展開するであろうところの数かずの場面を思い描きながら、終には作者の企図する術策にうまうまと考えられてゐる自分を見出すことになる。——という仕組みである。

私は秋成の家集『藤葉冊子』を繕いて、この種の恋の歌を探した

が、ついに得るところがはかった。さすがにこんな和歌は公表の家集には憚るところであつたのかもしれない。私はさうに、上田秋成全集とその研究(浅野三平編)を檢索して、ようやく「自筆短冊」に次の一首を見出したのである。これこそ私のいふ中の短歌体小説の発端なのであろう。

懸想文を定得て

うるほしきをのちようれし立(つ)春の心の花もひらくこの文

夏目成美の句集「成美家集」は、昭和三年に「日本名著全集」に収録されて以来、我々の身近なものであるが、その筆に成る画賛句とはると縁遠いものであつた。それが前記山口氏の著書に写真で紹介され、さうに近年「古典文学大系化政天保俳諧集」にも別の自画賛の字真が載つたので、彼此を比較対照することが出来る。(1)山口本・2 古典大系本・3 本稿)

1 はまはかに 帰る家めり 花さかり

随斎成美戲筆

(画) 二人立ちの人物。一人は羽織袴姿、腰に一刀、右手で桜の枝を肩に、左手に開いた扇。これに従う人物は詰問か、右手で頭を掻く。

2 よしもはまき しる人ふえて 春のくれ

随斎成美戲墨

(画) 向いあう立姿の二人。右は帯刀の武士、左は円頂黒衣の僧形、扇を持ち、話しかける態。

この二例と本稿とを較べ見ると、いさうかの共通点がある。まず三例とも画と句賛が内容的に合致していること。即ち画は句意をそのまま表現し、観る者の意表を衝くことがない。成美の時代にはすでに蕪村・巢北らによつて盛んに俳諧画が制作され、それらの中には句・画それぞれ別の材料を取合せながら、互ひの上で両者が可いあうという工夫を凝らす、いわゆる俳画がわつた。成美にもさうした作品があるかもしれないが、少くともここに挙げる作例は、それとは異なる性質のものである。

画についての共通点としては、墨線が力強く、運筆は筆流いじあることはいさうまでもないが、画材が人物画であること、しかも三作も二人立ちの歩行姿であることは、偶然ながら成美の作としてひつかかるものがある。周知の通り、成美は若年の頃脚疾にかかり、右足不随で、晩年には立居にも人手を煩わさねばほうはかつたといふ。一旅を欲して能はず、即ち旅せずして旅する工夫を成し得て自ら愁む。ことは山口氏の成美評の一節である。成美にとって、画もまたその不随を補う工夫であつたのかも知れない。

さてその発句、2、3は家集中の句である。2「よしもはまき」の下五「春のくれ」が家集には「はるは行こあり、るもついはね」の句は家集も同じであるが、下五に季語「藤の花」を置、四句の中の一句である。家集によつて池の三句を挙げる。

身のひまやうしうあ中みにふらの花

かにげ中こつとほるやぶらぢり花

こしよれば見さだめがにし藤の花

なお、そのものはぬれの句を理解する上に、自画の虚無僧姿が参考になるが、いま一つ、家集中に次の句のあることも見逃せはぬ。

わが多弁はるを人のにくみけるに

ものいふむいやはりけふは花の蔭

以上を通じて言えることは、成美の句、画は自身の経験や属目するところを材としたものが多く、しかも業非流行の時代にありながら、純粹率直に自己の表現に徹したところに彼の面目があり、その点においても、かの秋成とは好対照ではなからうか。

(五六年一〇月稿)